

上海日本人学校虹橋校での勤務を通して

— 世界一活気のある街、上海 —

前上海日本人学校虹橋校 教諭

埼玉県比企郡川島町立中山小学校 教諭 岡 安 明 久

キーワード：上海の歴史、学校紹介、英語教育、生徒指導、虹の架け橋

1. はじめに

長い歴史をもつ中国の中にあり、上海はもともと小さな漁師の町としてスタートした。長江の河口、海への入り口ということで、その歴史を遡ると6000年位前に今の上海市一帯が陸地となり、近隣の蘇州も含めた広い場所に漁師達が住むようになったと言われている。その後、唐時代に、現在の松江区に華亭県が置かれ、宋→南宋→元とめまぐるしく時代が進む中、上海鎮と呼ばれていた上海は重要な商業港として栄えた。16世紀後半の清時代には税関が設立され、人口も20万人を超える都市となった。そして、1843年の阿片戦争終了後、南京条約を受け上海は開港、1845年からイギリスが黄浦江の西側（浦西地区）に租界を始めたことを皮切りに（租界地とは中国の国家主権が及ぶことのない外国人居住区のことを意味する）、フランスやアメリカ、ドイツなどの列強各国が次々と西へ西へと居住区の開発を進めた。その由緒ある建物の多くは現在も使用されており、外灘（別名、BUND）と呼ばれるこの一帯は、欧米の生活様式と中国伝統の生活様式が混在する独特の雰囲気を漂わせ、「魔都」と呼ばれる別名を持っている。現在の上海は東アジア貿易の中心として世界に知れ渡り、とりわけ2010年の万博会場となる浦東地区は注目のエリアとなっている。黄浦江の東側に位置する、東方明珠タワーや金茂大厦、昨年末にオープンした101階建ての森ビル（世界環球金融中心）は日本のTV番組でもよく映像が流されている。さらに、1990年以降のこの20年間近くで、上海は想像の域を越える勢いで発展を続け、人口が1800万～2000万人といわれ、上海日本領事館へ届け出のある在留日本人の数だけでも、約55,000人に上る。2009年2月から3月にかけて、世界不況の影響を受け多くの日本人が上海を後にしたという情報を領事館員の方から聞いた。しかし、2010年には上海万博を控え、人口13億人以上、国内のインフラの整備も急ピッチで進む、世界が注目する中国の巨大マーケット市場の拡大に伴い、入ってくる日本人も同じく大きな数字で、その勢いに陰りどころか益々の勢いを感じる中国・上海である。

2. 日本人学校の紹介・・・『独歩博愛』

日本人学校の歴史を遡ると、1975年（昭和50年）「上海補習授業校」として児童生徒7名でスタートした。その後、少しずつ学校の規模も大きくなり、1987年（昭和62年）、文部省（当時）からの3名の派遣教員を迎え、児童生徒61名とともに、日本人学校として開校した。その後、上海の成長とともに日本人学校も成長を続け、1996年に現在の虹橋校がある虹梅路へ移転、この年、創立10周年を迎えた。さらに2003年以降は特に急激な成長を遂げてきた。2003年、その数が初めて1,000人を超え、1,278名でスタート。2004年が1,691名、2005年には2,209名と、この年バンコク日本人学校を抜いて、世界一の大規模校となった。

わたしが赴任した2006年（平成18年）4月には、上海日本人学校は虹橋校（浦西地区、48学級、児童数1,594名）、浦東校（浦東地区、33学級、児童生徒数813名）の二つのキャンパスに分かれ、両校合わせて児童生徒数2,407名、教職員186名という規模でスタートした。この年は、創立20周年という節目の年度であり、創立20周年記念式典に参加する機会にも恵まれた。式典への参加を通して、総領事館や商工クラブ、歴代の学校運営委員会やPTAの方々などの実に様々な関係者の協力と同時に、多くの現地スタッフ、上海市教育委員会、地元・中国の方々のおしみない努力と、ここで学ぶ子どもたちの活躍があって上海日本人学校の歴史が刻まれてきたことを痛感した。式典では、

10年後の自分宛に手紙を書いた。あと8年後（創立30周年記念式典の際？）にタイムカプセルから出され、手元に届くのが楽しみである。

さて、ここからは3年間の上海での担任としての勤務経験を通して、児童の活動を目の当たりにし、わたしなりに感じてきた課題がたくさんある中で、「①英語教育、②生徒指導、③虹の架け橋」という3つのしほり紹介をしてきたい。

3. 在外教育施設で学級担任を通して見えてきた課題

【①現地校の英語教育の充実】

赴任した年、日本で経験した年数回の不定期ベースでの英語活動しか知らないわたしにとって、上海日本人学校における週1時間の英語活動の内容の充実ぶり、児童の意欲的な活動への取り組みの様子に「すばらしい。」という印象を受けた。よく調べてみるとNativeの職員による計画的・意図的な段階を踏んだレッスンプランが組まれており、その質の高さを感じた。ところが、赴任期間中に訪問した現地小学（小学校とは言わず、小学という。日本にあてはめると小学は1～5年までである。）の英語授業の実態を知ったときは、さらに大きな衝撃を受けた。交流のあった現地校では小学1・2年で週3時間、小学3・4年で週4時間、小学5年では週5時間のカリキュラムが実践されている。低学年は英語に親しみを覚えさせること、簡単な単語や会話文をマスターすること。3年生では語彙力の向上、文法的学習が始まる。4・5年生では「話す・聞く」と合わせて、筆記に重点が置かれている。現地校職員との情報交換会の中でわかったことであるが、中国の英語教育も以前は「読む・書く」に重点が置かれていた。しかし、最近の傾向は「話す・聞く」の学習に重点が置かれ、その延長上に「書く」を意識した授業を展開していることがわかった。なお、日本の学校と違い1単位時間が短い中で多くの内容を取り扱うことから、宿題や家庭学習、週末の補習なども取り入れ、一人一人にあったきめ細かなフォローもされていた。こうした英語教育は、国際社会の中で重要な位置につく中国にとって、世界の中でのコミュニケーション能力を向上させるねらいを持っている。



日本人学校では現地校との交流を盛んに行っている。わたしは2年間にわたり6年生を担当したが、現地校の中学生との交流の際、日本人学校の児童は事前に一生懸命に中国語を覚え、交流を図ろうとしたのに対し、現地校の中学生たちは英語での交流を求め、それにとまどう日本人学校の児童をたくさん見かけた。これは一例であるが、中国の英語教育の充実振りと、その効果がしっかりと出ていた場面である。ただし、こうした充実した教育が行われているのは、中国の沿岸都市部や内陸部の恵まれた都市部でのみのことである。所得水準が低い省や農村部では、このような充実した教育の展開は難しいようである。この点については中国の教育における今後の課題の一つであると言える。それに対し日本では、全国一律に同じような教育が行えるという点では、大変恵まれていることにも気づかされた。



【②生徒指導】

日本人学校における生徒指導は日本におけるそれと大まかには同じであると思う。ただし、環境による違いから在外教育施設ならではの問題があると感じた。その中で決定的に一つ違うと思える点があった。在外教育施設の役割の一つとして、児童生徒達が日本へ帰国した際、日本の学校へすぐになじめるようにすることがあげられる。その中で、途中転出した児童が日本の学校へ編入すると、その多くが決まって日本での学校生活になじめずにいる事実を知った。それは本帰国をした児童自ら、時にはその保護者からも帰国後の相談を受けることが非常に多かったことから伺える。個人の性格や環境による違いはあると思うが、意外と適応するまでに時間がかかることがわかった。とかく転出をさせるとそれきりになってしまいがちであるが、児童達の帰国後しばらくの間のケアはとても重要であると感じた。編入してくる子の多くは家庭の都合で上海にやってくる。住み慣れた日本、地元を離れ、さらには親友達とも別れ、期待とともに想像に難くない大きな不安を抱えている。それをいかに取り除いてあげるか、これが担任教師やクラスの仲間求められる力だと思えた。児童の多くが編入時に似たような経験をしていることから、新しい友達に対する接し方はとても微笑ましかった。他方、帰国する児童のケアの場合、特に日本人学校の生活しか知らない児童が帰国をして初めて日本の学校へ通うというケースでは、児童も保護者も日本の学校でやっていけるかという点について、非常に大きな不安を抱いているケースが多かった。距離は離れても、担任として子供達の成長に携わった以上は、帰国後の児童の成長も見守るべきではないかと感じ、自分なりにできる支援や励ましを続けてきたつもりである。時には日本側の新しい担任の先生とも情報交換をしながら、1年以上も時間がかかったケースもあるが、ほぼ全員が帰国後の生活を充実のうちに過ごせるようになったようである。メールや電話などで相談に乗ることしかできないが、その小さな行為が帰国した児童や保護者の大きな支えになっていたことを知ると、改めて教員としてのやりがいを感じる事ができた。この点についての生徒指導は人の入れ替わりの激しい大規模日本人学校ならではの課題だと思えた。

【③虹の架け橋（国際理解教育の観点から）】

上海へ赴任が決まった時、なぜか脳裏に上海での反日デモの映像が思い浮かんだ。赴任する前年にたまたまテレビの映像で見ていた。その時は、まさか自分が上海へ赴任することになるとは考えてもいなかった。正直、赴任に際して一抹の不安はあった。そして赴任した日、自宅近くの日本総領事館を目にしてニュースで見たシーンが甦った。窓ガラスは割られたまま、他国の領事館に比べて明らかに嚴重な警備、そこには日本人に対する反感があったという事実を改めて知ることになったのである。しかしながら、その不安は時間の経過とともに薄れていった。日に日に中国人の温かさ優しさがたくさん触れる機会が増え、言葉が通じず戸惑っているわたしに道を教えてくれたり、買い物の仕方を手取り足取り教えてくれたり、結婚式や食事会に招待してくれたりと、時には1日観光や市内散策に付き合ってくれたり感謝の連続であった。中国国内へ現地理解に行ったときも都会の人以上に、人々の温かさを感じる事ができた。わたし自身の中国に対するイメージも3ヶ月後にはすっかり良いものに変わっていた。それに対して、わたしの知人達はどうか、メディアを通じてしか中国を知らない日本人の中国人蔑視、中国を非難する発言などをよく耳にし、目にした。とても残念な瞬間である。テレビでも日本の報道は中国の食糧偽装問題や偽物市場問題を徹底的に取り上げる。しかし、中国の企業の中にも真面目に取り組んでいる企業はたくさんある。「こんな風に紹介したら、絶対に中国に対するマイナス的な印象が強くなる」という日本のメディアのあり方、伝え方にも違和感を持ったのはわたしだけであろうか。

上海日本人学校の校歌の歌詞に「虹の橋」という言葉があり、わたしはその言葉が大好きである。2008年1～2月にかけて、中国は異例の大寒波に見舞われた。同5月、四川省大地震は記憶に新しいところである。そんな中、現地に行って活動するのは難しいが、困っている中国人のために、住まわせてもらっている中国のために自分達にできることはないかと児童達が考え、すぐに募金活動が始まったことに感心させられる場面があった。社会で日

中戦争を取り上げたとき、クラスには中国籍の児童もいたし、両親がともに中国籍の家庭も数多くいた。日中戦争について話し合うと、実に様々な意見や思いが児童達の口から出てくる。現地校の社会の教科書には日本の侵略戦争という表現が、しかし日本の小学校の教科書にはあいまいな表現で日中戦争について書かれている。どのようにまとめればよいのか悩んだが、結局、その授業では答えを出せずに終わってしまった。また、総合的な学習の時間では、自然と上海や中国のこと、また、日本との比較がされ学習が進められる場面が多かった。日本との違いからはじめはマイナスの部分に目を向ける児童が多い。しかしながら、学習が進むにつれ文化や習慣、考え方の違いであることに気づく。さらには、日本には中国から伝わったと思われる文化や習慣、発想や技術、料理や製品など、切っても切れない国同士の関係にあることに気づく児童が増えていく。国際理解教育で教えなければいけない目標に通じる何かを感じ取れた活動である。



4. むすび

上海日本人学校に3年間勤務したことで、探求心に満ちあふれた児童達との日々の授業、充実した中国や英語の授業、1000人規模の卒業式、1周400mトラックを持つ大きな競技場を借り切った数千規模の運動会、2泊3日の世界遺産巡りをする修学旅行、京劇・雑技団・中国拳法などに触れることができたチャレンジタイム、お互いに刺激し合って活動できた現地校との交流など、充実した学校生活を送ることができた。また、大規模校ならではの全国からの派遣教員と学びあったり、時には激しく、とことん思いや考えをぶつけあったりしたこと、全国の児童や保護者と「つながり」を持つことができたことは大切な財産である。さらにはお世話になった現地スタッフ、日常生活や医療機関などでお世話になった全ての中国人の方への感謝の気持ちは一生忘れられない思い出となった。

くしくも赴任2年目、日中は国交正常化35周年を迎えた。当時の福田首相の中国訪問は、翌日の中国国内のニュース番組や新聞でも大きく紹介されていた。政治レベルでは難しい問題を抱える両国であるが、人々のレベルではそうした感じはなく、とても距離が近い気がしている。周囲を見渡せばその昔、中国から日本へ入ってきた文化や習慣もたくさんあることに気づかされる。相手を非難するのは簡単だが、お互い様の部分があると思う。それを踏まえた上で、ぜひ、中国のいいところもたくさん知って、気づいてほしいと願う。そうすることで「近くて遠い国」と称される中国についての理解を深め、両国の関係がさらに歩み寄る日を楽しみにしている。校歌の歌詞「虹の橋」のように、これからはわたし自身が日中の「虹のかけ橋」となれるよう、3年間の経験で学び得たことをこれからの教育活動に活かしていく決意である。